第三章

「あ、おはようございます、劉楨殿」
「……うん、おはよう」

賊の襲来よりおよそ一ヶ月。
いよいよ若葉も芽生え、心地よい風が吹くようになった春盛りのその日。
しかし寝起きの劉楨は、とても爽やかとは言えない表情を浮かべていた。

「……何をしてるんだい？」
「え、ああ、これですか。『朝の拷問』ですよ」

場所は厩。
あの日以来この小屋は軍馬の為ではなく、捕虜と化した女賊・鄭の為の舎へと姿を変えていた。
そんな捕虜舎の中で、劉楨はにこやかに笑む武官の前で苦悶の表情を浮かべる少女の姿を見る。

「この子はかなりのお寝坊さんですからね。こうして叩き起こさないといけないんです」
「……あ、そう」
「あ、やってみますか？」

「いや、結構」

柱に括り付けられ、服も全て剥かれ、身動きも取れない状態の鄭。

その腹部は彼の言の通り、幾重にも連なる殴打痕により浅黒く変色してしまっていた。

そしてその年幼き顔容は苦痛に歪み、幾度となく嘔吐を繰り返したのであろう、吐瀉物の残滓によりぐちゃぐちゃに汚れている。

足元には、吐き戻した物体が水溜まりの如く――。

ボゴッ

「えぐっ……」

――などと劉楨が観察している間にも、武官は更なる拳を少女の細い腹へと打ち込んでいた。

薄い腹筋を貫いて、深々と突き刺さる拳。

瞬間に少女の口から唾液が飛散し、厩の壁を汚す。

そして拳が抜かれると、潰れた鄭の腹はゆっくりと元の形未満へと戻って行った。

「面白いでしょう。毎朝やっていますので、もうすっかり筋が潰れちゃっているんですよ」

「左様か。毎日とは勤勉だね」

「ええ。しかしそれでも、この子の口から意味のある言葉は全く出て来ないんですが――ねッ！」

ボゴッ
「うべぁ……」

白目を剥き、ビクビクと痙攣する鄭。
何度も殴られた結果、おそらく内臓が委縮してしまっているのだろう。
主君に仇成さんとする女賊の徒とはいえ、さすがに年端も行かぬ幼女がこうも苦しむ姿は、見ていて気持ちのいい物ではない。
しかし制しようにも、彼女が依然口を割らぬのであれば止める道理もまた存在しない。
結果、劉楨はただ静観するばかりであった。

「まぁ……いざ話そうとした時に声を出せるようにはしておいてやれよ」
「はっ、かしこまりました」

言いながら、武官が鄭を拘束していた縄を解く。
支えを失った鄭の体はそのまま真下へ崩れ落ち、そして自らが形成した吐瀉物の海へと顔面から倒れ込んだ。
それを見届けた武官は手を拭きながら、未だ痙攣止まぬ少女の小さな頭をより深部へ向けて踏みつける。
そして、すっきりとした顔で劉楨に向き直った。

「ところで劉楨殿、本日はこの後何かご予定が？」
「ん？　いや、特にないが」

「でしたら、是非とも『昼の拷問』もご覧になっていって下さい。今日は兵の鍛錬も休暇ですので、もっと面白い物がご覧になれますよ」
「……では、朝餉の後に見に来るよ」
「お待ちしております」

劉楨は何となく気が付いていた。
この武官、残党の捜索任務を他者に任せ鄭の拷問担当へ再任して以降、やけに気力が増している。
なるほど、おそらく彼にとって『拷問吏』の仕事は天職だったのだろう。
ならば、次ぐ『昼の拷問』とは一体どのような物になるのだろうか。

多分の呆れと少しの好奇心を抱きつつ、劉楨は泣き声が漏れ出す厩を後にした。

「こちらです、劉楨殿」
「うむ」

正午を回った頃。
日次の執務を軽く終えた劉貞は武官に案内され、兵糧庫近くの錬兵場へとやって来ていた。
ここはその名の通り、兵が鍛錬を行う場所である。
本来であれば兵卒達が槍を振るって汗水流すこの円形の砂地にて、しかしその中央に座すは縄を打たれ、布で目を隠された鄭であった。
ひどく怯えた様子で、見えざる周囲をしきりに見渡して身震いしている。
そんな彼女を取り囲むは、数百の兵卒達。
皆、裸で置き去られた鄭に向かって好奇と好色の視線を向けている。

「週に一度の休暇の日になりますと、兵の慰安の為にこうして『見世物』をする事になっているのです」
「……ほう」
「なかなか効果はありますよ。兵達は休暇が楽しみなようで、毎日飽くる事なく鍛錬に励んでくれていますから」
「それは何より。で、彼女をどうするんだね？」
「それはこれから決めるのです」
「何？」

言うや否や、武官が前に進み出る。

「皆の者！ 今日は待ちに待った見世物の日である！」
「「おおー!!」」

歓声の大合唱。
確かに士気は向上しているようだ。

「今日は劉楨殿もご覧になっている。誰ぞ、この善き日に見合う『演目』を奉じる者はおらぬか！」
「では団長殿！ 石打ちは如何でしょう！」
「団長殿！ ここは是非とも水攻めを！」
「いえいえ団長殿！ 針刺しこそ最善手ですぞ！」

なるほど、と劉楨は一人納得する。
これは確かに慰安の為の見世物ではあるが、それ以上に重要なのが『演目』を兵が『上奏』できるという点にあるのだろう。
普段の戦では己の意見など聞き入れてもらえない兵卒にとり、僅かでも己の意思を通せるこの方法は士気を上げる最良の手段なのだ。
であれば、強ち慰安も悪くはない。
尤も、この脳筋武官がそこまで思案を巡らせているかは謎であるが。

「うむ、針刺しという意見が気に入った！ ではこれより昼の拷問を開始する！」
「「おおー!!」」

うーん、しかしこれでいいのか寧陽軍。
これでいいのか劉楨よ。
自問自答しつつ、しかしまぁ、兵卒達の嬉しげな表情を見るに横槍を入れるのは無粋であろう。
そうこう劉楨が考えている内に、兵達は迅速に動いて鄭の四肢を押さえつけると、抵抗される間もなく股釘を打ち込んでいく。
結果、決議よりものの数秒で鄭の体は仰向けの大の字で砂上に張り付けられる事となった。
なんという手際の良さ。
もう少し他の所にも活かしてもらいたい物である。

「ではこれより、この卑しき女賊の体に皆で一本ずつ針を刺していってもらう！　最もこの雌狗を鳴かせた者には私から褒美をくれてやろう！」
「「うおー!!」」

鄭よりも君達の方がよく鳴いているじゃないかと、劉楨は思いこそすれ口にはしなかった。

「団長殿、ではまず私が！」

一人の兵卒が前へ出る。
小柄だが筋肉質な、盾兵と思しき男であった。
その手には、女や針子が裁縫の際に使うような細い針が一本握られている。

兵は鄭の前、もとい上まで歩み寄ると、その身へ針先を向ける。

「やっ、やめろぉ……」

か細い声で哀願する鄭。
しかし男はむしろ悦んだ顔で鄭の頬を撫でると――。
そのまま、針を左鎖骨の辺りに深々と刺した。

「いぁッ!!」

突然の鋭い痛みに、鄭は思わず叫ぶ。
しかし身悶えする鄭を後目に、男は一礼して隊列の中へ戻って行った。

「次ぃ！」
「はっ、では私が！」

次いで出てきた男は、おそらく槍兵であろう、細身だが長い腕を持った兵卒であった。
その狐のような顔貌に笑みを浮かべつつ、男は足早に鄭の下へと向かう。

「う、ぅ……」

目隠しの下で涙を流しているであろう鄭。

しかし男は一切躊躇せず彼女の腹に膝を乗せると、針を寝かせてその平坦な胸元に向かって突き出した。

「ひぎゃあッ!?」

劉楨の位置からはよく見えなかったが、おそらくは右の乳首に針を刺したのだろう。

ただでさえ敏感な部分を横に貫かれた事で、鄭が発した叫び声は先程より大きな物となった。

男は満足げに笑み、一方で隊列の中からは先程の男の物であろう舌打ちの声が聞こえ、そして笑い声に満ちる。

この場面だけを見れば和やかな風にも思えるが、しかし実際にやっている事は幼子の未熟な肉体を痛めつけているだけである。

と、その時。

戦列の只中からふと声が漏れ聞こえた。

「おいおい、ぬるいぜそんなんじゃあよぉ」

その声と共に歩み出てきた兵。

それは、明らかにこのような僻地の兵には不釣り合いな、絢爛な赤い具足を身に纏った少年であった。

年の頃は、おそらく鄭と同い年程か。

しかしその佇まいは、およそ彼女のような平民の出とは思えない。

そして何より、似ている。
劉楨の主、曹孟徳、その人に。

「おっと、子文様」
「オレにやらせてくれよ、なぁ、いいだろ?」

劉楨の方を見遣る少年。
字を聞き、劉貞もまた気が付いた。
曹公の子息にして、嫡子曹子桓の弟。
曹彰、その人であると。

確か武芸の練にと軍さえ従えずに各地を放浪していたと聞いていたが、まさかこの寧陽に来ていたとは。
しかも幼年で、斯様な威風を携えて――。

しかし劉楨が驚くよりも早く、曹彰は鄭の下へと歩みを進めていた。

「鳴かせりゃいいんだろ? そんなのカンタンじゃん」

そして、鄭を見下ろす。
その圧を感じたのか、鄭もビクンと身を震わせる。
だが、鄭が何か声を発するよりも早く――。

曹彰が突き出した針は的確に鄭の股間を捕え、その薄き肉丘の狭間へと刺し込まれた。

「ひぎゃあああああああああッッッ!!!」

瞬間、天を劈く悲鳴が響く。

当然だ。

曹彰が針を向けた先は未だ覗かぬ少女の蕾。

秘められたその陰核へ、寸分違わぬ精度で突き刺さったのだから。

幼きとはいえ仮にも女、陰核を刺し貫かれる痛みはこれまでのどんな拷問よりも辛かろう。

「う、うむ……さすがは子文様ですな」

「まぁね。でも、まだまだこんなモンじゃないでしょ?」

腰を浮かせビクビクと跳ねる鄭を後目に、曹彰は隊列の方へと向き直る。

そして、揚々と手を広げて告げた。

「さぁ、もっともっと、ぞんぶんに、この子を痛めつけてあげようよ。みんなで、ね」

――それからの展開は、凄まじい物となった。
まさしく王の血脈、曹子文の『号令』を受けた兵卒達は一気呵成に鄭の下へ押し寄せ、次から次へとその身に針を刺していった。
ある者は彼に従い股間へ。
ある者は道を選び他所へ。
瞬く間に少女の肉体は剣山へと姿を変えてゆき、やがて全員が針を刺し終えた頃には、彼女はすっかり気を失ってしまっていた。
針を抜いて軟膏を塗り、再び厩にぶち込んで数時間。
目を覚ましたのであろう鄭は、書斎の劉楨にも聞こえる程の大声で叫び声を上げ、そして一時間程でようやく沈静化した。

「……」

しかし、だ。
さすがにこれは『興行化』が過ぎている。
拷問である事には違いないだろう、しかし彼女とて奴隷ではない。
捕虜が捕虜である以上、彼女に対する必要以上の加害は今後より強い恨みとなって返ってくるだろう。
二匹目の蛇の毒は、怨嗟を帯びて強くなるのだ。

「……はぁ」
「どうしたの劉楨さん、溜息なんかついちゃって」

「あぁ、いえ……何でもございませんよ」

そして、今。

劉楨の眼前には、すっかり寛いだ様子の曹彰が退屈そうに座している。

仮にも君主の御子息、客人であると同時に貴人だ。

粗相は決してあってはならない。

「～♪」

「……」

彼曰くしばらくは兵卒としてこの軍を『見学』したいとの事だったが、それが今後どのような影響を齎すのか全く分からない。

しかし少なくとも彼は僅か十歳にして一人旅に臨むだけの実力者である。

不敬ながら、彼が居てくれるだけでも賊に対する牽制となるのは間違いないであろう。

「でさぁ、劉楨さん」

「はっ、何ですかな?」

「あの子……鄭ちゃんって言ったっけ? あの子はこの後どうするつもりなの?」

「どうする、と申されましても……賊の情報を聞き出した後は解放するか、或いは陽動策にでも使おうかと思案しておりますが……」

「ふぅん……じゃあアレ使い終わったらさ、俺がもらっても問題ない？」
「！」
その言葉に、一瞬劉貞の表情が強張る。
「まさか、賊を娶るおつもりで……？」
「違う違う、『オモチャ』にするんだよ。ああいう遊び方ができるんなら、俺もそうだし、兄上や父上もきっと喜んでくれると思うんだよね」
曹公や子桓殿が、あの女賊で『遊ぶ』――。
その様を少し想像して、劉貞は思わずゾッとした。
悪戯な笑みを浮かべた曹彰。
なるほど、彼もやはり曹公の御子息。
覇道を成す、王の一族――。
劉楨はこの時、後に魏と称する事となる彼らの国へ絶対の服従を誓ったのであった。